

特集「飲酒運転対策プロジェクト」

飲酒運転を起こすドライバーの特徴について

独立行政法人 国立病院機構
久里浜アルコール症センター
松下幸生

要約

一般住民を対象とした調査から得られた飲酒運転を起こすドライバーの特徴について米国および我が国で行われた調査について紹介した。

米国での調査は2001年に行われたもので、16歳以上の一般市民6002名が対象である。全体の22%が飲酒後2時間以内に運転した経験があると回答しており、その割合は男性、20歳代で高い。性別、体重、飲酒量、飲酒時間、飲酒してから運転するまでの時間から計算で求めた運転時の血中アルコール濃度では11%が違法基準を超えた濃度で運転していた。自動車事故と飲酒運転の経験は相関していた。

国内の調査は2008年に行われ、全国の成人7500名を対象としている。飲酒運転の経験は男性の30%、女性の8%にみられ、年代では男性は40歳代～60歳代で多く、女性では30歳代で飲酒運転経験者の割合が高い。飲酒運転経験のあるものは飲酒開始年齢が早く、飲酒頻度が高く、平均飲酒量が多い。飲酒運転経験はアルコール依存症のスクリーニングテスト結果と相関しており、飲酒運転経験者で依存症が疑われる割合が高い。

A. 序文

飲酒運転を起こすドライバーは多様であり、一概に特徴をあげることは困難であるが、飲酒運転を繰り返すものは飲酒そのものに問題を抱えているものが多く、アルコール乱用や依存といった疾患の症状として飲酒運転を起こしているといえる。アルコール使用障害と飲酒運転の関係は他項に詳述されているので、ここでは一般住民を対象とした飲酒運転に関する国内外の調査結果を紹介する。

B. 米国の調査

まず、米国で行われた一般住民を対象とした飲酒運転に関する調査を紹介する¹⁾。

この調査は、米国運輸省の高速道路交通安全局（National Highway Traffic Safety Administration: NHTSA）が飲酒運転の現状、世論やその変化について調査することを目的として1991年から隔年で実施しており、2001年に6回目の調査が行われた。2001年は運転可能な年齢である16歳以上の一般市民6,002名が対象となった、電話による聞き取り調査である。

飲酒運転の経験については、全体で22%が過去1年間に飲酒後2時間以内に運転した経験があると回答している。男女で比較すると男性で割合が高く、年齢で比較すると20代が多い（図1）。調査結果から飲酒2時間以内の運転は調査前1年間に全体で9億600万回、16～20歳は3000万回、21～29歳では1億6200万回、30～45歳では3億1400万回、46～64歳では2億6500万回、65歳以上では1億2600万回と試算している。

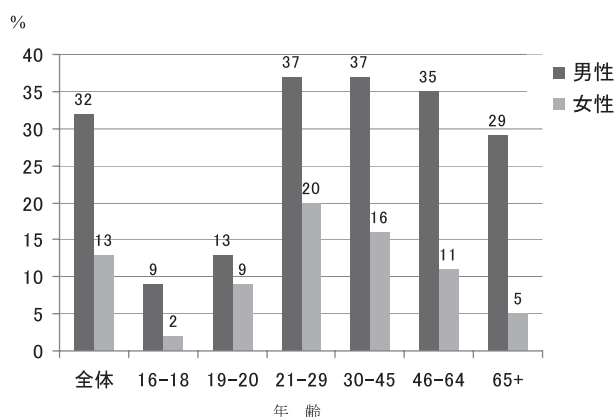


図1 過去1年間に飲酒后2時間以内に運転した経験がある人の割合 (%)

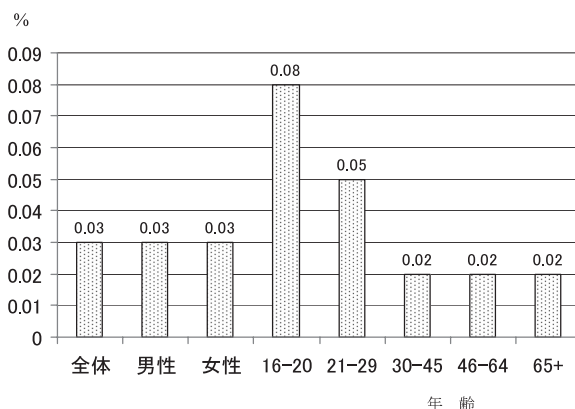


図2 飲酒運転時の推定血中濃度 (%)

米国では21歳未満の場合は少しでも飲酒して運転すると違法だが、21歳以上の場合はある程度までは飲酒しても運転することが許されている。その基準は州によって異なるが、血中アルコール濃度が0.08%または0.10%以上で飲酒運転になる。運転前の飲酒量は平均すると2.6ドリンク（ビール350ml1本が1ドリンク）であった。この調査ではNHTSAの公式（性別、体重、飲酒量、飲酒時間、最後に飲酒してから運転するまでの時間から計算で求める）に当てはめて運転時の血中アルコール濃度を推計しているが、平均では0.03%である（図2）。一方、11%は違法基準である0.08%を超えていた（図3）。年齢でみると21歳未満では運転前の飲酒量の平均は5.1ドリンクと若年者は運転前の飲酒量が多い。

一方、飲酒をして安全に運転できないかもしれないドライバーの車に同乗した経験があると回答したのは全体の11%であり、その割合は年齢が若いほど多くなる（図4）。

過去2年間に実際に飲酒運転で検挙された者の割合は全体で1%、飲酒して2時間以内に運転した経験のあるものでは2%と多く、多量飲酒者ではその割合は4%まで高くなる。

事故の経験の有無については、過去2年間に自分が運転して自動車事故にあった割合は全体

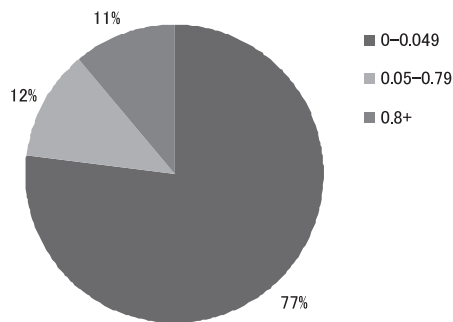


図3 推定血中濃度の分布 (%)

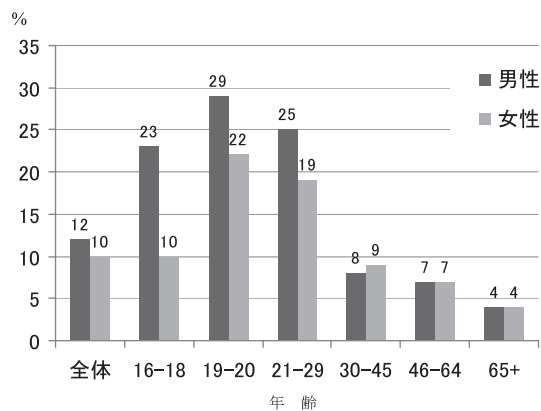


図4 過去1年間に飲酒したドライバーの車に同乗した経験のある割合 (%)

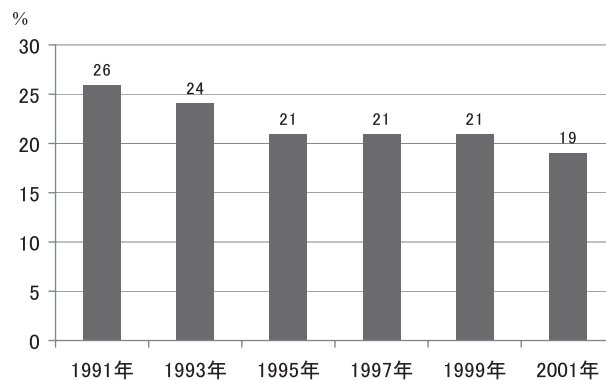


図5 調査前1カ月に飲酒後運転した者の割合の変化 (%)

の16%であるが、飲酒運転経験の有無で分けると経験のあるものでは19%、経験のないものでは14%と飲酒運転経験者で高い。飲酒は全体の事故の2%に関係していた。

1991年から行われているこの調査の年ごとの変化をみると、過去1年間に飲酒後2時間以内

に運転した経験をもつ割合は1991年23%, 1993年24%, 1995年20%, 1997年21%, 1999年23%, 2001年23%と増減はありながらほぼ一定している。過去1年間の飲酒運転の回数は平均で1993年13.4回, 1997年11.1回, 1999年11.3回, 2001年10.9回と減少傾向にある。同様に過去1カ月に飲酒後に運転した者の割合は図5に示すように減少傾向にある(図5)。

C. 国内の一般住民調査結果

国内では2008年に行われた全国の成人飲酒実態調査に飲酒運転に関連した項目がある。

この調査は、層化2段無作為抽出法により、全国の国勢調査地点から356地点を無作為に選び、20歳以上の地域住民から男女7,500名を無作為に抽出して飲酒実態や飲酒に関連した項目について聞き取り調査を行ったものである²⁾。使用された調査票は面接調査部分と自記式調査部分からなり、面接調査票には、喫煙状況、睡眠の実態、飲酒状況、アルコールハラスメントの実態、飲酒量、ICD-10の診断基準に基づくアルコール依存症、アルコールの有害な使用、フラッシュカどうか、対象者の人口統計学的背景、病歴などでの項目が含まれている。自記式調査票には、問題飲酒のスクリーニングテスト(AUDIT, CAGE, KAST, 新KAST)、飲酒運転の経験と態度および対策についての意見、などが含まれている。

調査は、全国一斉に平成20年6月12日から7月21日までの間に実施した。各地区の調査員が対象者の自宅で面接調査部分は面接により聴取した後、自記式部分に記入してもらった。有効回答は、4,123名(55.0%)から得られた。回答の得られなかった理由として、拒否(1,730名, 未回答の51.2%), 一時不在(972名, 28.8%), 転居(230名, 6.8%)などが大きな割合を占めていた。未回答のなかで、一時不在(972名), 転居(230名), 長期不在(167名), 住所不明(147名)は、もともと面接困難な対象者であったと考ええると、これらを除いた5,984名が対象者となり、実質有効回答率は68.9%となる。

アルコール依存症の同定には、ICD-10の診断基準を用いて診断できるように作成した面接調査票を用いた。すなわち、アルコール依存症の遺伝に関する国際共同研究で用いられた半構造化面接調査票³⁾(SSAGAの日本語版: 樋口 進, 村松太郎翻訳)から、ICD-10のアルコール依存症に該当する質問項目を抽出して使用した。

アルコール関連問題の評価を行なうために、KAST⁴⁾、CAGE⁵⁾、アルコール使用障害同定テスト(Alcohol Use Disorders Identification Test, AUDIT)⁶⁾および新KAST⁷⁾という4種のアルコール関連問題スクリーニングテストを用いた。これらのテストは自記式調査部分に含まれている。

飲酒運転については、自記式調査票を用いて①飲酒運転の生涯経験、②飲酒運転による検挙経験、③飲酒後に酒が体から抜ける時間についての知識について調査を行っている。この調査票の内容は、久里浜アルコール症センターと神奈川県警察との共同研究で使用された調査票に準じている⁸⁾。

1. 飲酒運転の生涯経験率

飲酒運転の経験を、「経験なし」「経験あるが検挙なし」「検挙経験1回」「検挙経験2回以上」に分けると、後者3カテゴリーの割合は、男性は31.5%, 女性は8.4%が飲酒運転の経験があると回答している(表1)。飲酒運転の経験があると回答したものを年齢階級別に見ると、男性では、40歳代から60歳代の割合が多いが、女性では30歳代の経験者率が高かった(表2)。各年代で飲酒経験のあるものの割合を運転経験のないものを除いて集計すると、特に女性で経験者率が

表1 飲酒運転経験の有無（性別）

飲酒運転に関する項目	男性	女性
飲酒運転経験あり+検挙2回以上	25 (1.36%)	1 (0.05%)
飲酒運転経験あり+検挙1回	103 (5.62%)	9 (0.41%)
飲酒運転経験あり+検挙なし	450 (24.54%)	174 (7.95%)
飲酒運転経験なし	1,169 (63.74%)	1,405 (64.21%)
運転の経験なし	87 (4.74%)	599 (27.38%)
欠損値	46	55
合計	1,880	2,243

1) 上記の%は欠損値を除いた値.

表2 飲酒運転経験者の男女別社会的背景情報

	男性N (%)	女性N (%)	統計的有意差
年齢分布 総数	581	185	
平均年齢	53.2 ± 14.0 歳	42.9 ± 12.0 歳	
20 - 29 歳	26 (4.5)	19 (10.3)	$\chi^2=74.3331$
30 - 39 歳	89 (15.3)	63 (34.1)	df=5
40 - 49 歳	117 (20.1)	55 (29.7)	P<0.0001
50 - 59 歳	139 (23.9)	28 (15.1)	
60 - 69 歳	137 (23.6)	16 (8.7)	
70 歳 -	73 (12.6)	4 (2.2)	
婚姻状況 総数	580	185	
結婚（同居，別居，内縁）	484 (83.5)	148 (80.0)	$\chi^2=10.0551$
離婚	15 (2.6)	10 (5.4)	df=3
死別	8 (1.4)	8 (4.3)	P=0.0181
未婚	73 (12.6)	19 (10.3)	

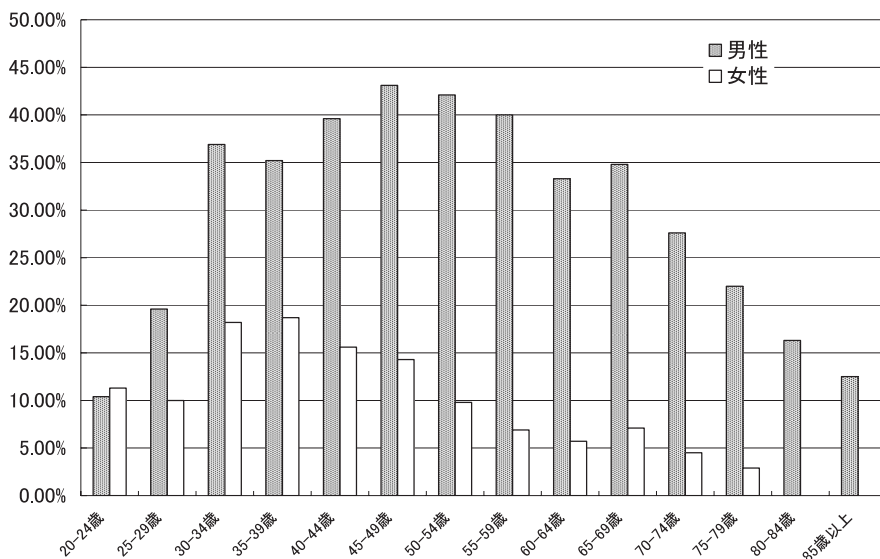


図6 各年代での飲酒経験を有する割合（運転経験のないものを除く）（%）

表3 社会的背景情報と飲酒運転との関係：男性

		運転経験あり			運転経験なし	統計的有意差 (χ^2 乗検定)
		飲酒運転 + 検挙あり	飲酒運転 + 検挙なし	飲酒運転なし		
年齢分布	総数	128	450	1,169	87	
	平均年齢	53.4 ± 13.6 歳	53.0 ± 14.1 歳	53.4 ± 17.3 歳	62.8 ± 15.8 歳	
	20 - 29 歳	6 (4.7)	20 (4.4)	143 (12.2)	5 (5.8)	$\chi^2=100.2202$
	30 - 39 歳	19 (14.8)	70 (15.6)	158 (13.5)	6 (6.9)	df=15
	40 - 49 歳	23 (18.0)	94 (20.9)	166 (14.2)	4 (4.6)	P<0.0001
	50 - 59 歳	31 (24.2)	107 (23.8)	201 (17.2)	14 (16.1)	
	60 - 69 歳	35 (27.3)	102 (22.7)	265 (22.7)	20 (23.0)	
	70 歳 -	14 (10.9)	57 (12.7)	236 (20.2)	38 (43.7)	
婚姻状況	総数	128	449	1,167	87	
	結婚 (同居, 別居, 内縁)	112 (87.5)	370 (82.4)	870 (74.6)	61 (70.1)	$\chi^2=31.4773$
	離婚	5 (3.9)	10 (2.2)	23 (2.0)	4 (4.6)	df=9
	死別	1 (0.8)	6 (1.3)	40 (3.4)	4 (4.6)	P=0.0002
	未婚	10 (7.8)	63 (14.0)	234 (20.1)	18 (20.7)	

表4 社会的背景情報と飲酒運転との関係：女性

		運転経験あり			運転経験なし	統計的有意差 (χ^2 乗検定)
		飲酒運転 + 検挙あり	飲酒運転 + 検挙なし	飲酒運転なし		
年齢分布	総数	10	174	1,405	599	
	平均年齢	49.5 ± 12.5 歳	42.5 ± 12.0 歳	48.0 ± 14.6 歳	65.1 ± 15.0 歳	
	20 - 29 歳	0 (0.0)	19 (10.9)	161 (11.5)	29 (4.8)	$\chi^2=646.5932$
	30 - 39 歳	3 (30.0)	60 (34.5)	278 (19.8)	24 (4.0)	df=15
	40 - 49 歳	2 (20.0)	52 (29.9)	312 (22.2)	24 (4.0)	P<0.0001
	50 - 59 歳	2 (20.0)	26 (14.9)	310 (22.1)	79 (13.2)	
	60 - 69 歳	3 (30.0)	13 (7.5)	237 (16.9)	171 (28.6)	
	70 歳 -	0 (0.0)	4 (2.3)	107 (7.6)	272 (45.4)	
婚姻状況	総数	10	174	1,402	598	
	結婚 (同居, 別居, 内縁)	7 (70.0)	140 (80.5)	1,088 (77.6)	371 (62.0)	$\chi^2=182.2243$
	離婚	1 (10.0)	9 (5.2)	57 (4.1)	28 (4.7)	df=9
	死別	2 (20.0)	6 (3.5)	80 (5.7)	151 (25.3)	P<0.0001
	未婚	0 (0.0)	19 (10.9)	177 (12.6)	48 (8.0)	

増加し、20-24歳では男性よりも割合が高い (図6)。

表3, 4には飲酒経験と検挙の有無で分けた社会経済的背景情報を示す。表3は男性, 表4は女性の結果である。男女とも運転経験のないものは年齢が高い傾向がある。男性では運転経験

表5 飲酒パターン・飲酒運転日数と飲酒運転との関係：男性

		運転経験あり			統計的有意差
		飲酒運転＋ 検挙あり	飲酒運転＋ 検挙なし	飲酒運転なし	
初飲年齢	総数	128	436	1,058	P<0.0001
	平均年齢	18.4 ± 2.4 歳	18.7 ± 2.9 歳	19.5 ± 3.0 歳	
習慣飲酒開始年齢	総数	118	355	621	P=0.1917
	平均年齢	25.3 ± 8.0 歳	26.2 ± 8.5 歳	26.8 ± 9.0 歳	
飲酒頻度	総数	128	450	1,164	P<0.0001
	週5日以上	91 (71.1)	235 (52.2)	365 (31.4)	
	週1～4日	21 (16.4)	111 (24.7)	241 (20.7)	
	月1～3日	7 (5.5)	51 (11.3)	152 (13.1)	
	年1～11日	4 (3.1)	30 (6.7)	147 (12.6)	
	1年以上非飲酒	5 (3.9)	23 (5.1)	183 (15.7)	
	飲んだことなし	0 (0.0)	0 (0.0)	76 (6.5)	
飲酒日の飲酒量 (ふだん飲むときの 1日飲酒量)	総数	126	446	1,150	P<0.0001
	0－20g	24 (19.1)	168 (37.7)	665 (57.8)	
	21－59g	69 (54.8)	207 (46.4)	389 (33.8)	
	60g以上	33 (26.2)	71 (15.9)	96 (8.4)	
1日平均飲酒量	総数	126	446	1,147	P<0.0001
	0－20g	40 (31.8)	256 (57.4)	867 (75.6)	
	21－59g	62 (49.2)	154 (34.5)	242 (21.1)	
	60g以上	24 (19.1)	36 (8.1)	38 (3.3)	
最大飲酒日の1日飲酒 量	総数	123	436	1,125	P<0.0001
	0－99g	28 (22.8)	143 (32.8)	688 (61.2)	
	100－199g	62 (50.4)	203 (46.6)	320 (28.4)	
	200g以上	33 (26.8)	90 (20.6)	117 (10.4)	

- 1) 1日平均飲酒量とは、「飲酒日の飲酒量」×1年間の飲酒日数÷365である。
- 2) 最大飲酒日とは、過去12ヶ月間に最も多く飲酒した日である。
- 3) グラム（g）とは、酒類に含まれる純アルコールの重量である。純アルコール＝酒量×酒の度数×0.8÷100。ビール中ビン1本、日本酒1合弱、カンチュウハイ（7%）、ウイスキーダブル（60mL）1杯が、だいたい20gである。

のある者は飲酒運転経験のない者より中年世代の割合が高い。

2. 飲酒運転と飲酒状況

表5、6に飲酒運転の経験の有無で初飲年齢、習慣飲酒開始年齢、飲酒頻度、飲酒量、最大飲酒量の比較を示す。表5は男性、表6は女性の集計である。飲酒運転経験のあるものは飲酒を始めた年齢が若く、飲酒頻度が多く、平均飲酒量、最大飲酒量とも有意に多い。さらに飲酒運転経験の有無を検挙の有無で比較すると、検挙があるものでより飲酒頻度・量が多いことがわかる。この傾向は男女とも同じ傾向にある。

表6 飲酒パターン・飲酒運転日数と飲酒運転との関係：女性

		運転経験あり			統計的有意差
		飲酒運転＋ 検挙あり	飲酒運転＋ 検挙なし	飲酒運転なし	
初飲年齢	総数	10	171	1,188	P<0.0001
	平均年齢	19.1 ± 4.3 歳	18.9 ± 2.2 歳	20.9 ± 5.6 歳	
習慣飲酒開始年齢	総数	9	113	359	P=0.2214
	平均年齢	26.2 ± 5.2 歳	28.0 ± 9.2 歳	29.8 ± 11.2 歳	
飲酒頻度	総数	10	174	1,403	P<0.0001
	週5日以上	5 (50.0)	49 (28.2)	140 (10.0)	
	週1～4日	3 (30.0)	46 (26.4)	222 (15.8)	
	月1～3日	1 (10.0)	37 (21.3)	242 (17.3)	
	年1～11日	0 (0.0)	24 (13.8)	348 (24.8)	
	1年以上非飲酒	1 (10.0)	18 (10.3)	260 (18.5)	
	飲んだことなし	0 (0.0)	0 (0.0)	191 (13.6)	
飲酒日の飲酒量 (ふだん飲むときの1 日飲酒量)	総数	10	174	1,388	P<0.0001
	0～20g	3 (30.0)	119 (68.4)	1,135 (82.4)	
	21～59g	5 (50.0)	38 (21.8)	209 (15.2)	
	60g以上	2 (20.0)	17 (9.8)	34 (2.5)	
1日平均飲酒量	総数	10	174	1,377	P<0.0001
	0～20g	5 (50.0)	151 (86.8)	1,325 (96.2)	
	21～59g	4 (40.0)	17 (9.8)	48 (3.5)	
	60g以上	1 (10.0)	6 (3.5)	4 (0.3)	
最大飲酒日の1日飲酒 量	総数	10	167	1,349	P<0.0001
	0～99g	2 (20.0)	108 (64.7)	1,158 (85.8)	
	100～199g	5 (50.0)	45 (27.0)	169 (12.5)	
	200g以上	3 (30.0)	14 (8.4)	22 (1.6)	

1) 1日平均飲酒量とは、「飲酒日の飲酒量」×1年間の飲酒日数÷365である。

2) 最大飲酒日とは、過去12ヶ月間に最も多く飲酒した日である。

3) グラム (g) とは、酒類に含まれる純アルコールの重量である。純アルコール＝酒量×酒の度数×0.8 ÷ 100。ビール中ビン1本、日本酒1合弱、カンチュウハイ (7%)、ウイスキーダブル (60mL) 1杯が、だいたい20gである。

3. 飲酒運転をした理由

表7に飲酒運転の理由に関する集計を示す。飲酒運転の理由として多いのは男性では「飲酒量が少ないので大丈夫だと思った」、「飲酒からの時間がたっていた」、「目的地が近かった」、「事故を起こさない自信があった」、「大きな問題にならないと思った」といった回答が多く、女性では「飲酒からの時間がたっていた」、「飲酒量が少ないので大丈夫だと思った」、「他の交通手段がなかった」、「目的地が近かった」といった回答が多い。これらを検挙の有無で比較すると、男性では「大きな問題にならないと思った」、「飲みたい気持ちが強かった」、「いつもの場所だから大丈夫」、「事故を起こさない自信があった」といった項目で検挙のあるもので有意に頻度が高い。一方、女性では「いつもの場所だから大丈夫」という項目で検挙されたことのないも

表7 飲酒運転をした理由（男女別）

理由	男 性			女 性		
	飲酒運転＋ 検挙あり	飲酒運転＋ 検挙なし	p	飲酒運転＋ 検挙あり	飲酒運転＋ 検挙なし	p
飲酒運転の自覚がなかった	18.9%	19.7%	NS	30.0%	19.4%	NS
大きな問題にならないと思った	62.2%	46.3%	0.002	50.0%	48.2%	NS
悪いことだと思わなかった	10.3%	11.4%	NS	10.0%	13.0%	NS
飲酒量が少ないので大丈夫	78.7%	78.4%	NS	70.0%	85.6%	NS
飲酒からの時間がたっていた	72.4%	74.7%	NS	80.0%	69.6%	NS
飲みたい気持ちが強かった	51.2%	37.0%	0.004	50.0%	42.6%	NS
前日の飲酒量を減らせなかった	20.6%	19.1%	NS	30.0%	10.1%	0.053
いつもの場所だから大丈夫	59.5%	49.1%	NS	30.0%	61.5%	0.048
目的地が近かった	73.0%	73.2%	0.04	60.0%	81.0%	NS
事故を起こさない自信があった	76.4%	65.8%	0.02	50.0%	61.7%	NS
他の交通手段がなかった	57.6%	56.1%	NS	80.0%	70.2%	NS

- 1) 表の数字は、「はい」と回答した者の割合。
- 2) 「理由」とは、飲酒運転をした理由。
- 3) 「方法」とは、飲酒運転をなくす方法。

ので有意に頻度が高い。

これらの結果から、飲酒運転の理由として酒の影響が少ないという判断と運転距離が短いという理由が多く、男性では運転技能に対する自信もその理由になっていることがわかる。また、検挙されたものでは飲酒運転に対する認識の甘さに加えて、アルコール依存の基準の一つでもある飲酒欲求の強いことが挙げられており、検挙されたものではよりアルコールに対する依存傾向が背景にあることが推測される。

4. 飲酒運転とアルコール関連問題

表8に飲酒頻度、多量飲酒、最大飲酒量、AUDIT点数を飲酒運転経験の有無および検挙の有無、回数で比較したものを示す。表8は男性、表9は女性の集計である。男性では飲酒運転なし、飲酒運転あり＋検挙なし、飲酒運転＋検挙1回、飲酒運転＋検挙2回以上の順にAUDIT点数が高くなっており、アルコールに関連した問題が深刻であることを示している。一方、女性では検挙回数が2回以上のものは一人しかおらず、検挙1回のもも9人と少ないので注意が必要であるが、男性と同じ傾向がみられ、飲酒運転とアルコール依存を含めた関連問題の有意な相関が示されている。図7に新KASTによる関連問題評価と飲酒運転の相関を示す。新KASTで評価した非問題飲酒群に対する問題飲酒群の飲酒運転経験率比をみると、新KASTで分類すると男性2.3倍、女性4.5倍と問題飲酒群で飲酒運転経験のあるものが有意に多い。図には示していないが、CAGEで分類した場合は、非問題飲酒群に対する問題飲酒群の飲酒運転経験率は男性2.2倍、女性3.1倍であった。

D. まとめ

一般住民を対象とした調査から得られた飲酒運転を起こすドライバーの特徴について米国お

表8 アルコール関連問題と飲酒運転：男性

		運転経験あり				P
		飲酒運転＋ 検挙2回以上 (N=25)	飲酒運転＋ 検挙1回 (N=103)	飲酒運転のみ (N=450)	飲酒運転なし (N=1,169)	
飲酒頻度	週5日以上	68.0%	71.8%	52.2%	31.2%	<0.0001
多量飲酒	飲酒日 60g 以上	32.0%	24.8%	15.9%	8.4%	<0.0001
最大飲酒	最大飲酒日 150g 以上	25.0%	27.3%	20.6%	10.4%	<0.0001
AUDIT	8点以上	72.0%	49.5%	39.4%	15.6%	<0.0001
	13点以上	52.0%	27.7%	14.7%	4.9%	<0.0001
	15点以上	36.0%	19.8%	9.5%	3.4%	<0.0001

- 1) 表のパーセントは該当する者の割合。
 2) 表中のNは、項目によって多少異なる。
 2) 統計計算は4群の比較。

表9 アルコール関連問題と飲酒運転：女性

		運転経験あり				P
		飲酒運転＋ 検挙2回以上 (N=1)	飲酒運転＋ 検挙1回 (N=9)	飲酒運転のみ (N=174)	飲酒運転なし (N=1,405)	
飲酒頻度	週5日以上	0.0%	55.6%	28.2%	10.0%	<0.0001
多量飲酒	飲酒日 60g 以上	0.0%	22.2%	9.8%	2.5%	<0.0001
最大飲酒	最大飲酒日 150g 以上	0.0%	33.3%	8.4%	1.6%	<0.0001
AUDIT	8点以上	100.0%	33.3%	14.0%	2.9%	<0.0001
	13点以上	0.0%	33.3%	4.1%	0.8%	<0.0001
	15点以上	0.0%	22.2%	2.9%	0.5%	<0.0001

- 1) 注は男性と同じ。

よび我が国で行われた調査について紹介した。

1. 米国での調査結果

- 2001年に行われたもので、16歳以上の一般市民6002名を対象とする。
- 全体の22%が飲酒後2時間以内に運転した経験があると回答しており、その割合は性別では男性、年代では20歳代が高い。
- 21歳未満の若年者は運転前の飲酒量が多い。
- 性別、体重、飲酒量、飲酒時間、飲酒してから運転するまでの時間から計算で求めた運転時の血中アルコール濃度では11%が違法基準を超えた濃度で運転していた。
- 飲酒したドライバーが運転する車に同乗した経験があると回答したのは全体の11%であり、その割合は年齢が若いほど高くなる。

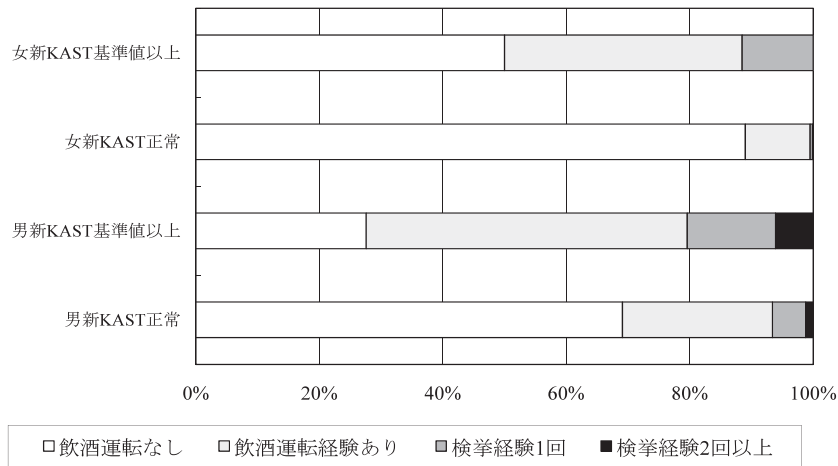


図7 新 KAST 基準と飲酒運転の相関

6) 自動車事故と飲酒運転の経験は相関していた。

2. 国内の調査

- 1) 2008年に行われ、全国の成人7500名を対象としている。
- 2) 飲酒運転の経験は男性の31.5%，女性の8.4%にみられ、年代では男性は40歳代～60歳代で多く、女性では30歳代で飲酒運転経験者の割合が高い。
- 3) 飲酒運転で検挙された経験のある割合は男性の6.98%，女性の0.46%であり、複数回検挙された経験を有するものは男性の1.4%，女性の0.05%である。
- 4) 飲酒運転の経験を有するものは性別では男性に多い。年代は男女で異なり、男性は40歳代～60歳代、女性では30歳代、40歳代で割合が高い。
- 5) 飲酒運転の経験のあるものは経験のないものと比較して飲酒を始めた年齢が若く、飲酒頻度が高く、1回当たりの飲酒量が多い。
- 6) 飲酒運転の理由について男女とも“飲酒量が少ないので大丈夫”という回答が最多であった。また、検挙された経験のあるものでは飲酒運転の経験はあるが検挙された経験のないものと比べて“大きな問題にならないと思った”，“飲みたい気持ちが強かった”という回答が有意に多い。
- 7) アルコール関連問題を有する割合は飲酒運転の経験があるもので高く、さらに検挙された経験のあるもので高く、飲酒運転の経験の有無，飲酒運転で検挙された経験の有無はアルコール関連問題と相関する。

E. 今後の課題

米国、国内で実施された一般住民における飲酒運転の経験や飲酒運転をするドライバーの特徴に関する調査結果を報告した。米国と比較すると我が国では若い男性の飲酒運転割合が低い一方、中年男性の飲酒運転経験の割合が高いことが特徴である。また、若い女性の飲酒運転経験を有する割合が高いことは、飲酒運転に限らずこのグループにおける今後のアルコール関連

問題が深刻化する可能性を示唆しており、十分注意して観察し、早期に介入することが必要である。

日米双方の調査結果から、飲酒運転をするドライバーは、飲酒運転に限らずアルコールに関連した問題のハイリスクグループであり、飲酒運転対策のみならずアルコール関連問題への予防的、治療的介入を要するグループであることは確実である。今後はどのように早期発見・介入を行っていくかその手段が検討されるべきである。まず、飲酒運転はアルコール関連問題の氷山の一角であり、飲酒運転で検挙されることは介入のチャンスでもあることを社会が認識すべきであろう。

文献

- 1) Royal, D.: Volume I: Summary Report. National Surveys of Drinking and Driving. Attitudes and Behavior; 2001. Washington, D.C.: U.S. Department of Traffic Safety, National Highway Traffic Safety Administration, 2003.
(http://www.nhtsa.gov/portal/site/nhtsa/template.MAXIMIZE/menuitem.18e416bflb09b6bbbf30811060008a0c/?javax.portlet.tpst=4670b93a0b088a006bc1d6b760008a0c_ws_MX&javax.portlet.prp_4670b93a0b088a006bc1d6b760008a0c_viewID=detail_view&itemID=9e3b805032a36110VgnVCM1000002fd17898RCRD&overrideViewName=Article)
- 2) 樋口 進：わが国における飲酒の実態ならびに飲酒に関連する生活習慣病、公衆衛生上の諸問題とその対策に関する総合的研究。厚生労働科学研究費補助金循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業，平成21年度総括・分担研究報告書（主任研究者 石井裕正），pp.16-38, 2010.
- 3) Reich, T., Edenberg, H.J., Goate, A., Williams, J.T., Rice, J.P., Van Eerdewegh, P., Foroud, T., Hesselbrock, V., Schuckit, M.A., Bucholz, K., Porjesz, B., Li, T.K., Conneally, P.M., Nurnberger, J.I. Jr., Tischfield, J.A., Crowe, R.R., Cloninger, C.R., Wu, W., Shears, S., Carr, K., Crose, C., Willig, C. and Begleiter, H.: Genome-wide search for genes affecting the risk for alcohol dependence. *Am. J. Med. Genet.*, **81** : 207-215, 1998.
- 4) Saito, S. and Ikegami, N.: KAST (Kurihama Alcoholism Screening Test) and its applications. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, **13** : 229-235, 1978.
- 5) Mayfield, D., McLeod, G. and Hall, P.: The CAGE questionnaire: validation of a new alcoholism screening instrument. *Am. J. Psychiatry*, **131** : 1121-1123, 1974.
- 6) Saunders, J.B., Aasland, O.G., Babor, T.F., de la Fuente, J.R. and Grant, M.: Development of the Alcohol Use Disorders Identification Test (AUDIT): WHO Collaborative Project on Early Detection of Persons with Harmful Alcohol Consumption-II. *Addiction*, **88** : 791-804, 1993.
- 7) 尾崎米厚，松下幸生，白坂知信ほか.：新しいアルコール症のスクリーニングテスト開発の試み，厚生労働科学研究「成人の飲酒実態と関連問題の予防に関する研究（主任研究者: 樋口 進）」平成16年度総括研究報告書.
- 8) 中山寿一，樋口 進：神奈川県警察本部交通部交通総務課. 飲酒と運転に関する調査，久里浜アルコール症センターと神奈川県警察との共同研究，最終報告書.
<http://www.kurihama-alcoholism-center.jp/>